

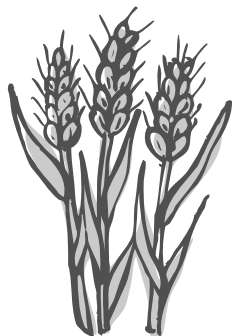


季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第八四号〜

芒種ぼうしゅ

六月六日



イネ科のトゲ

先日、思わぬ地元の宝に巡りあいました。

奈良時代を代表する須恵器すえきの「長頸壺ちようけいこ」です。鳥羽湾に浮かぶ答志島とうしじまから出土されました。東京国立博物館所蔵で、海外で展示されることが多く、「世界を駆け巡る土器」といわれるほど。平成一年に国の重要文化財指定を受けました。地元ではほとんどお目にかかることはできませんが、私は齋宮歴史博物館で開催された企画展で偶然見ることができたのです。暗い緑色の釉薬ゆうやくがかかった長い壺で、高さが五七センチと大きなものでした。

出土したのは答志島の山頂部にある蟹穴古墳かにあな。七世紀後半に築かれた円墳で、内部は横穴式石室になっていたようです。今は天上石がなく、石室の上部分を失っていますが、ここからほぼ完全な姿で須恵器が出土したのです。学芸員によるとおそらく岐阜で作られ、伊勢湾を渡って島にもたらされたと考えられており、当時の伊勢湾の交易ルートや、答志に大きな勢力をもつ豪族の存在が伺えます。

伊賀焼や信楽焼しがらきに見られるような暗い緑色の自然釉がかかっているのですが、これは土器を焼く時に稲やススキなどで覆ったため、そのトゲの部分に含まれるガラス質が自然釉になったといえます。

芒ぼう（のぎ）のある穀物を蒔く時期にあたる今ごろを二四節気では芒種と呼びますが、この芒ぼう（のぎ）というのがイネ科の植物の外殻にある針のような突起、つまり稲や麦などの実の殻からの先にあるトゲのことをいいます。そのトゲに自然釉を作り出すガラス質があったのです。稲や麦は私たちの食料としてだけでなく、陶器の釉薬にもなっていたのでした。

麦はそろそろ実りの季節、麦秋を迎えます。

文 千種清美